

徳元年譜稿

—寛永六年—

安藤 武彦

寛永五年（一六二八）戊辰 七十歳

○十一月、徳元、東下す。武州江戸の「俳諧にすぎ給へる人々」の所望によって、『徳元独吟千句』が成る。

『塵塚集』上卷にはその各百韻の発句のみを記す。又『徳元俳諧鈔』にも一部分が収録。その後、徳元はそのまゝ江戸に定住をしないで、翌六年春一旦帰京した。因みに、『関東下向道記』の奥書「寛永五年十二月廿六日」は「寛永六年」の誤りで、徳元の記憶がわからくる誤記とすべきであろう。

□『千句』

巻頭の年記は「寛永五年十一月吉日」。以下、各百韻の発句のみを挙ぐ。

第一 鎌何 鏈梅の散しかゝれるこたちかな 徳元

第二 她何 鶯の籠にし竹をねくらかな

第三 餅何 春の日もめくるや牛の花車

第四 高何 一声やくちく／＼にいふ郭公

第五 何薄 涼しさのあたへハ金の扇かな

第六 向何 露分てふむすねはぎの花野哉

第七 鬢何 雲はらふ嵐や月のかゝみとき

第八 何鮓 立田川や紅くよるもみち鮓

第九 何袋 口切にしくれをしらぬ青花哉

第十 帷何 武蔵野の雪ころはしか富士の嶽

追加 魚鳥 こゝりにとすぎうつすひをの網代哉

（自奥）

此千句ハ一とせ武州江戸へまかり

ける頃はいかにすぎ給へる人々に

浅からず馴たてまつることの次而に

旅宿のなくさミかてらひとりこと

すして見よなんとなり愚意に

及かたき事なりとふかくいなミ

ぬれとしゐてのたまひけれハ

よき所なくて終に鵜笑の種と

なりぬよのつねのいひ捨には

たかひ書とゞめぬれはさし合

遠輪廻にすくはりてまれく

おもひよる一ふし有といへと

それさへかなハす追加の百韻

めつらしくもやと魚鳥の名を」^{45オ}

ならへんとかゝつらへハ生類

二句の外つゞき侍らんこと

いかゞとおもひその名をかくして

立入ければふせやに生ふる

はゞ木々となん人はおもひ

給ふへくや

」^{45ウ}

(末裔齋藤徳潤の識語)

右御千句は遠祖従五位尉

齋藤齋宮頭入道徳元公みつから

書せ給ひて家に伝りけるを予

門人高橋思孝書うつし度

よし懇望いなひかたうて

ゆるしけるに明和九年二月廿九日

火に彼亭にて焼失言語道断

の事なり是ハかねてうつし

置ところ也 御言の葉ハ残ると

いへとも御筆をほろほし

たることかへすくいはん方」^{46オ}

なし思孝ハかひなき命

のかれ出て只此事をおそれ

かなしふ御筆にて我世まで

伝りたるといふこと斗も

家に残さんとしるし置

もの也

齊藤徳潤

明和九年三月 在判^{46ウ}

□『塵塚誹諸集』上

同年(※寛永五年)の霜月、於三武州江戸人々御所望によりて、つかふまつりし千句の発句

第一 鐘梅のちらしかゝれるこだち哉

(以下、略。前記『徳元独吟千句』ト同ジ)

『齋藤徳元独吟千句』はすでに森川昭氏によって昭和卅四年八月に、未刊連歌俳諧資料(俳文学会刊)の一冊として解説を付して翻刻せられた。むろん私も亦、原本を実見済みではあるが、内容の概略についてはいまは氏の解説を引用しておきたい。書誌は左の通りである。

東大図書館蔵。横本の写本一冊。縦二一・五、

横一五・二センチ。全体四九枚、うち白紙一枚。

表裏表紙各一枚。表紙も本文と同質の紙で、その左肩に「千句」と墨書。題簽はない。一頁概ね十

四行。

本千句の内容は、從來全く知られてゐなかつたわけではなく、部分的には諸書に散見する。例へば『塵塚誹諸集』(笹野堅氏編・『齋藤徳元集』所収)

に本千句の各百韻の発句を記し、「同年(寛永五年六月末昌塚と共に有馬温泉に遊んだ年をさすか)の霜月於武州江戸人々御所望によりてつかふまつりし千句の発句」と前書きしてゐる。管見の限りに於いては、その全体の伝本の存することを知らない。ただこの東大本は虫損が甚しく、判読困難な箇所が多いのは残念である。

巻末の齋藤徳潤の識語により、本書の伝来は明らかである。又この識語により、徳元の子孫が明和の頃生存してゐることが知られるのも珍しいことかと思ふ。

識語を書き留めた末裔の齋藤徳潤については慶長元年(38歳)の条の(註1)で略記したが、いま改めて『寛政重修諸家譜』巻第四百七、齋藤氏(第21冊め)の条から掲出しておく。

●利武 ●利矩

利益としなだ

熊三郎 致仕号徳潤 母は幸賀某が女。

(吉原)

享保十三年十月十五日はじめて有徳院殿に

まみえたてまつり、十四年四月四日遺跡を

継、明和四年八月四日致仕す。安永七年七

月十六日死す。年六十八。法名徳潤。

徳潤は正徳元年に生まれ識語の明和九年三月時は62

歳、隠居の身分になっていた。先祖の徳元についても

関心を有していたらしく、同時代の幕臣山岡浚明(まつらぎ)(徳

元の親友山岡景以とは一族で安永九年十一月、59歳

歿)著『武蔵志料』(宝暦十一年正月三日起筆。ただ

し本写本は「明和七庚寅龍集仲冬上旬吉旦」写、内閣

文庫蔵本による)七ノ上にも、

斎藤徳元

寛永五年十二月 関東下向道記 紙子きるしはず

の比……(中略)

今案に此紀行狂歌八十七首発句廿一句有 今その

徳元年贈稿

曾孫斎藤徳潤利益に此事問しに 其時当国に下り

今の伝馬町馬喰町のわたりに住しとそ その所未

詳 と答へし

と語っている。本千句の史的評価についても同じく森

川氏は、「又千句形式の連句にして、その全容を知り

得るものとしては『守武千句』に次ぐもので、初期連

句の典型として貴重なものである」(稿本・徳元年譜)

と述べられて、私も亦賛成である。なお、寛永期の世

相をうかがわせるような付合が第三・餅何の巻名残ノ

折裏に、

(名ウ5) かしこくも色をかへたるくる船に

(名ウ6) 何と見付ていきるいきりす

(名ウ7) 長さきや咲も残らぬ花の春

(挙句8) てらすや霞酌かはすらん

と詠んでいる。

さて、所望者である武州江戸の「俳諧にすぎ給へる

人々」とは、いったい誰を指すのであろうか。以下は

大胆なる仮説である。自奥の末に、

その名（文脈上から考えれば魚鳥の名なれど、ここでは暗に所望者の名を指すか）をかくして立入ければふせやに生ふるは木々となん人はおもひ給ふべくや

とあるが、右の傍線部は『古今和歌六帖』の、「園原や伏屋に生ふる帯木のありとて行けどあはぬ君かな」（巻五）をふまえていよう。「園原」は歌枕。『新古今和歌集』巻十、霧旅に、「（九一三）信濃のみさかのかたかきたる絵に、園原といふ所にたび人やどりて立ちあかしたるところを／立ちながら今夜は明けぬ園原や伏屋といふもかひなかりけり（藤原輔尹）」とあり、従って、奥書の冒頭部分「旅宿」の縁で文末（園原）の「ふせや」なる語が連想されたのであろう。因みに『俳諧類船集』にも、

伏屋

信濃 杜 その原

は木々……

筥木

その原 伏屋の森

……

とある。「園原」は、長野県下伊那郡阿智村の地名。飯田城下への街道筋、阿知川のほとりに有之。飯田城からはまゝ近し。

ところで、徳元と親交があった連歌大名、八雲軒脇坂安元について関連するところを述べてみたい。「寛政重修諸家譜」巻第九百三十七、脇坂氏（第15冊め）の条には、

●安治——●安元

甚太郎 淡路守 従五位下 母は西洞院宰相某が女。

……（元和）三年大洲を転じ信濃国伊奈郡、上総国長柄郡のうちをいて五万五千石をたまひ、信濃国飯田の城に住す。……寛永三年九月又両御所（※秀忠、家光）御入洛により扈従す。（略）承応二年十二月三日飯田をいて卒す。年七十（※天正十二年出生）。藤亨安元八雲院（※八雲院殿藤亨安元

大居士と号す。妙心寺の隣花院に葬る。……(71

頁)

とある。園原は信濃飯田城主安元の所領地であったのだ。

安元母——園原——安元。脇坂安元著『八雲愚草』

(金井寅之助編著『八雲軒脇坂安元資料集』所収、和泉書院刊)によれば、淡路守安元の母玄昌院は西洞院宰相時当が娘、寛永十六年四月十七日に八十五歳をもって所領地たる信州飯田城内に於て病歿。片山勝「脇坂安元の母について」(『伊那』一九五八・八月号所収)、ほかに『下伊那史』第七巻を参照。折しも安元は、すでに寛永十五年九月より駿府城の警営を命ぜられていた。もとより安元は孝子の心ざしや切で、左の如き悼歌を詠んでいる(上巻—三三頁)。

卯月十七日に母の身まかりけるとて、足をそらにして、十九日に駿河の国へ告来り侍りけるに

きのふまで千世もといのるたらちめの永き別を聞

そ悲しき

その哀惜の様は大久保幸信(忠隣四男、寛永五年赦免アリテ旧知二千石、寛永十九年六月56歳歿)の追悼歌の詞書にも詳細に知ることが出来る。

時を感じてハ花鳥になミたをそゝくたくい、
おりにふれことに渡りてなきにあらねとも、
逝水かへらす、にはたすみにうつる月のかけ
とゝむへき世にしあらず。爰に脇坂氏安元と
云人あり。才かしく身になすへきわざはい
ふにやハをよふ、やまともろこしの代々のふ
ることに思ひをそめ、定まれる五の典も肝ふ
かく、あるハ和国の風雅にさへ心をのへ、詞
花言葉その根ふかく其葉しけれる人なむおハ
しける。いにしとし三冬の始より、駿府の警
営に命せられて、此所にいたりぬ。予も又鷗
鷺の盟をなしつゝ、鷗鷺の交これなむとおも
ひなからも、朝夕とふらハれし情に、をのつ
からかたちを忘れ漆膠の約をなし、したしミ

を菫葛に頼ミあへり。さるに彼慈母おハしき。本より此人孝子の心さしせつなるゆへ、よのつねの別さへおしかのつゝつかのまも志かたくおもハれけれど、いさなふに力なく、知所に残し置給ふ。しかあるに、三伏の夏立比より起居例ならぬとつけ来りければ、くれまどふ心のあまり、物にあたれる心地して、ひとへに身にかハらんといのり、医療（いりょう）さまくをつくし給へと、八十年あまり五のとしにして、卯月十七日に終焉なりしハ、夢路にことならずそ侍りける。此人孝をつくし給ふをきくに、曾子の跡をたつね、黄童か床の枕をあふきしたくひ、おほかめり。此こゑのかなしミをきくに、さてもそや哥うたハぬためし、ことに出す音にたてず、しつミしるとも、しゝまも又ほいにハあらすと、ねんしいひて、聊も余哀をとふらハむと、筋なき三首の蜂腰を綴りて、かきやりすつることになむ。これ

もけふりになし給へと云事しかり

藤原幸信

柞原なけきの本ハ秋またて木の葉の上をける白

露

信濃なるそのは木々のなくて世のあハぬためし

をさそ歎らん

対するに安元も亦、長文の詞書でもって応え、前記『新古今』を本歌とする悼歌を詠んだことであつた。

あハぬ世のならひかなしきその原や伏屋もとハて

きゆるは、木々（三三四頁）

と。実は、安元も『古今和歌六帖』を所蔵していたのだった。そのことは神原忠次著『一搦集』（ひまきいしやう）第一冊め、正保二乙酉年（※忠次、41歳）のくだりに、

脇坂淡路守安元より古今

六帖といふ歌書をかりう

つして返しつかハすついでに

筆のあとあれはこそしれ古も

今も六種の歌のすかたは

返し

むへなるやいにしへ今の言の葉の

六の種をし君かとれしは

と見えている。仏教大学教授竹下喜久男氏のご教示によれば、『一掬集』は榊原家文書（※榊原政春氏蔵）の

一本で枳形写本全三冊、文雅の譜代大名、館林城主侍従忠次が寛永五年正月ときに24歳の歳旦詠を巻頭に、寛文五年三月廿九日61歳歿時の辞世歌に至るまでの歌集であった。嗣子政房編。なお榊原忠次は寛永十八年二月廿五日に賦何路連歌を興行（※榊原家文書。拙稿「誹諧初学抄」以後の徳元連歌など榊原家蔵懷紙に見る最晩年期―を参照）、徳元も出座し第五句めを詠んでいる。「誹諧初学抄」が成立してちょうど一ヶ月後であった。竹下教授に深謝する。

すれば、徳元が奥書の末にさりげなく書き留めた「伏屋に生ふる帚木」とは、「園原や伏屋」を暗示し、それは大名間に、孝子として仄聞される親交の脇坂淡路守安元宛を意味していると考えられはしないだろ

うか。当代知る人は知るぞかしであらう。因みに翌々七年二月三日には、在江戸鍋丁の安元邸に於て連歌会が催されて徳元は出座、以後たびたび同座した。敢えて仮説を試みておく。

寛永六年（一六二九）己巳 七十一歳

○三月二十日、徳元はすでに帰京してこの日、八条宮御所に昌胤・玄陳・宗順・慶純等と共に伺候し、見舞った。西洞院時慶も見舞う。（※追記（）参照）

□『時慶卿記』寛永六年春三月二十二日の条

一、八条殿へ参入一時斗伺候 自禁裏御使時直也
随庵モ後ニ見舞也 昌胤 玄陳 宗順 慶純 徳
玄 島ノ藤左衛門入道自庵等候 後ニ御脉被見候

（卷五十五）

□野間先生、前掲論考参照。

桂光院一品式部卿宮智仁親王は三月五日にご発病（『時慶卿記』）、以後その模様については、写本『桂光院殿いたみ』（里村昌琢編）に収録される高松宮好仁

親王の、桂光院四十九日忌追善歌の前書中に、

桂光院弥生の十余日より例ならぬ御けしきありしかとも かつくをこたりさまにみへさせたまひしを いかにかにそや またおなしき月のすゑつかたよりなやみまさらせたまひて つゐに卯月のはしめの七日になかき別となりたまふをおしまぬもなかりける……

と記される。病名は昌琢の追善記に、「いにし三冬のすへつかた武州江戸に有しに 一品宮桂光院殿御腫物をいたくなやませたまふよしきこへしかは云々」(『桂光院殿いたみ』に収録)とあり、徳元も同様に記しているところからも、それは悪性の腫瘍であった。

『桂光院殿いたみ』は八条宮と風交深き昌琢が編集の追善集である。島原図書館松平文庫蔵。図書番号、松一三二—13。大写本一冊。雷文に牡丹唐草模様空押しを表紙。収録される諸家は前掲の高松宮を始め、沙門良恕・隠叟英侃・烏丸光広・阿野実顕・水無瀬氏成・西洞院入道円空(時慶)、そして巻末は昌琢で、

正に八条宮御所のサロンを髣髴とさせる追善集。

その後の、親王の病勢は、谷澤尚一氏作成の「三江紹益略年譜(抄)」(昭47・10・28、俳文学会全国大会研究発表資料)寛永六年四月の条を見れば、

四、一 △西洞院時慶、八条御殿に伺候。半井成信と慶友に会う。(時慶卿記)

けふきてハ心もかろし夏衣 色(智仁親王)

若葉の色のいさぎよき庭 昌侃
時鳥軒端の山ニ声きよて 東(良恕法親王)

三 △親王、重態に陥る。(同)

という風に好転はしなかったらしい。なお谷澤氏の論考「徳元と三江紹益」(『連歌俳諧研究』第四十四号所収)をもあわせ参照されたい。

○春、この頃か。『貞徳永代記』の記事によれば、江戸より徳元・石田未得(未徳)が、堺より云也卜養・慶

友下養が、大坂より津田休圃らが上京して、貞徳発句による百韻俳諧の会に出座す、と言う。

□『貞徳永代記』（松月庵随流著、元禄五年三月刊）

俳諧諸国にひろまり、軽口の誹士数多有けり。江戸より徳元・未得上京して貞徳にまみへ、弟子に成ければ、大坂・堺はもとより、発句・百韻などのぼせて、貞徳へ批点頼みけり。依^レ之点者許免の印にとて、貞徳翁の発句を申請、京・江戸・伊勢・大坂・堺、名ある点者共一巡をして百韻成就せり。其時の発句、

京田舎言葉の花の幾めぐり

貞徳

そだちがらこそなまれ鶯

江戸齊藤 徳元

蝶の舞誰を師匠に習ふらん

堺 未徳

かげ日なたなくてらす朝ひこ

同 卜養

海ごしの山はそなたの物にして

同 慶友

乗り心よき舟の自由さ

大坂 空生存

隣から隣へ月もうら伝ひ

同 休圃

おなじかし屋の秋の夕ぐれ

伊せ山田 望一

右之百韻の写し、山本西武にありしを写して、此度面八句を書付侍る。（巻之一―夷中誹士の事）

□森川昭氏「半井卜養年譜」（日本古典文学影印叢刊30

『卜養狂歌絵巻』収録、昭60・5刊）

寛永五年の条

○八、九月頃、父云也とともに「慶友」の名で貞徳らと京都で一座、百韻成る（『貞徳永代記』、研究・三五頁）。この会と顔ぶれが多く重なる連句作品が伝存する。昭和五十年十一月東京古典会の入札目録に見えるもので、やや横長の懐紙とおぼしく、左方に月を描き「探幽齋筆（印）」とあり、右方に、

窓の前に咲や好文[※]ほくの花

長頭丸

なく鶯の声きくめ石

慶友

泉水につぶく雪間へ谷かけて

徳元

落るながれのつめたきの末

成安

百出しの金の土器ほどふらし

休圃

と各自筆で記す。

（※好文―梅の異名）

□『紅梅千句』（貞徳ら作、北村季吟跋、承応二年正月成、明暦元年五月刊）

季吟跋

右ちよの誹諧連歌は、なにがし友仙先生ため有て催し給へる也。ためとは何のためぞ。花咲の老翁は此道の長にいませば、あめのしたのかみ中下部まで其風をあふぎ、その流れをくむ事、いしがめの龍にすがり、うしばへの驥につけるがごとし。休甫・徳元のともがら、卜養・望一など遠きさかひをこえて、添削をまかせ合点をこひねがへり。

因みに右季吟の跋文が成つたのは承応二年六月である（近世文学資料類従・古俳諧編39の拙稿解題）。また貞徳が在世の頃であった。

百韻の成立年代については、貞徳発句ならびに徳元の脇句が共に春季であること。「江戸より徳元・未得上京して」とあるが、これは前述の寛永五年冬十一月徳元東下、そして翌春いったん京都へ帰っていることを指すのか。かくの如くに解すれば「江戸より徳元上

京」は辻褄が合うのである。従って私は「貞徳らと京都で一座、百韻成る」を本年春の成立としておきたい。森川氏は「寛永五年八、九月頃」としておられる。

それから制作年時は不明であるが、『歴代滑稽伝』によれば牡丹花肖柏の末として徳元・卜養・玄札との三吟が成る、と言う。場所は慶友卜養の宅か。

□『歴代滑稽伝』（許六撰、正徳五年九月跋刊）

一堺の慶友、江戸の玄札・徳元は同時の作者にして、牡丹花の末也。

三吟
夏の季のさかひにさかむ時鳥 徳元

水をうつ木の花に待友 慶友

きれるにも庭の垣根の掃除して 玄札

○四月五日、徳元は八条宮御所に伺候し、見舞った。

□『塵塚集』上

卯月五日ばかりに、一品式部八条宮腫物をいと

たうなやみにおはしましける時まかりて

めでたしやきよくやはらぐ空の色

五月雨に水やまさりて今出川

□谷澤尚一氏「徳元と三江紹益」

しかるに親王は、四月三日頃から全く危篤状態に陥入り、一般の面会は許されない。斯様な状況を併せ考えると、右の発句は如何にも不見識としか言いようがない。ところが、これより先、親王の発句により次の三吟がある。

けふきてハ心もかろし夏衣 色

若葉の色のいさきよき庭 昌侃

時鳥軒端の山ニ声きよて 東

東は良恕法親王の替名である。

朔日は更衣であった。此朝、小康を得て親王は発句を詠まれ、枕頭に待している昌侃が脇をつけた。これを徳元が伝え聞き、知っていたのではなからうか。昌侃と徳元は熟知の間柄である。思うに、徳元の発句は祝意をこめて献じたものとしたか

考えられない。容態の急変は知る由もなかったの
であろう。さすれば、句意は親王の発句に照応する
から、容易に理會できるし、矛盾も氷解する。

徳元句の前書中「腫物」には「晴れ」の意を懸け、それは「めでたしや」句の下五「空の色」に、すなわちうすき青色、晴れたる空の如き色の意に照応する。なお「色」は八条宮の替名でもある。確かに谷澤氏が説かれる如く右徳元の「めでたしや」の発句は親王の発句に照応したものであろう。因みに昌侃の脇句「若葉の色」とは、夏着用の襲の一種で表は青色、裏は薄青色であった。

●四月七日、八条宮智仁親王薨去。御年五十一歳。桂光院丘夫と諡する。慈照院の位牌には「桂光院一品式部卿宮尊儀」。同月十九日、慈照院に於いて葬儀。御墓は相国寺塔頭慈照院（京都市上京区今出川通烏丸東入相国寺門前町七〇三）にあり。

□『忠利公御日記写』四月十二日の条

八条ノミヤ様去七日ニ御他界候由岡部内膳殿より
申来候

□谷澤氏、前掲論考参照。

八条宮と岡部内膳正長盛との風交は慶長末以来続き、
連歌の会に一座すること四度、薨去の折にも長盛は京
都に滞在していたらしい。従つて扶持人（連歌の衆
カ）たる徳元とも交流が存在したかも知れぬ。

さて徳元は、このとき悼句二句を詠んでゐるか。

此寺のほぞんかけたかほとゝぎす

つきがねに一こゑそへよ郭公（『塵塚集』上）

と。上五「此寺の」はむろん相国寺塔頭慈照院を指す
のであろう。野間先生は手向として、同じく『塵塚
集』下―夏に収録される、

追善 時鳥たぶ一こゑよなむあみだ

なる発句を挙げてはおられるが（前掲論考「仮名草子
の作者に関する一考察」51頁）、私はこれを一周忌追
善の折かとしておきたい。

徳元の師で法橋里村昌琢は、このとき柳営連歌興行

のため江戸に滞在していた。八条宮の「御腫物をいた
くなやませたまふよし」を知つて、急ぎ帰京の途につ
く。『忠利公御日記写』寛永六年四月の条（※松平忠
利、吉田在城）に、

廿二日丑 昌琢江戸より被登候

廿四日卯 雨降、連歌候、……

名もしるしたかしの山の夏木立 昌琢

廿五日辰 昌琢被登候、……

と見えている。そして「日夜おほつかなかりしにから
うして上」り多分、月末から五月上旬にかけて御所近
くの新在家中ノ町の宅へ帰つていったことであらう。

されども間に合わなかつた。六月四日に、御墓を詣で
て長文の追善記と百句を手向けた。その折の、ものせ
し追善記たる前書は『桂光院殿いたみ』の巻末に収録
されるが、寛永文化圏のなかで華麗に振るまう八条宮
智仁親王像が生き生きとデッサンされている。よつて
左に全文を翻刻しておく。



御物・智仁親王像（宮内庁蔵）

いにし三冬のすへつかた武州江戸に有しに
一品宮桂光院殿御腫物をいたくなやませ
たまふよしきこえしかは 日夜おほつかなか
りしにからうして上りしかは 卯月七日
にえさらぬミちにおもむき給ひ 後の御わさ」オ
などもすき侍りければあへなくて御墓
に参り拜みはへるに 御おもかけのうつゝのことく
なりければなみたおさへかたき折ふし 蜀魂
鳴けるももよをしかほなれば口にまかせ侍
りける
ほととぎす世をおとろけと鳴音かな
さりとともとおもひくゝてあつまより
かへり都の夢そかなしき
おもひきやけにさためなき世にはあれと」ウ
いましもきみをかくこひんとハ
誠に唐のふかき道までも学はせたまひて
難波の事あきらけ やまとたましひの御身
にて花もみち月雪の折には詩歌聯句和

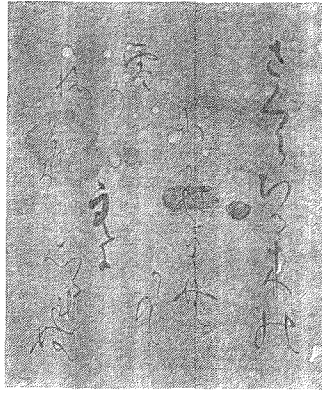
漢連歌などもよをさせたまひて 其道く
のともからをもめしよせて 昼ハ終日夜ハ
よもすからの御あそひたへす 又下桂に別
業をかまへさせたまひて時につけたる花
の下草をうへませ 一かたには柏のわたり
をもうつさせたまひて 三伏のいとあつき比ほひ」オ
は人くゝめしあつめ御前にてさかなたと調
せさせたまひて流にさかつきをうかへ 石上に
詩を題し歌をつらねあけのそほ舟をさし
出棹の歌に心をやりしも ひくれぬれば
都にかへり侍るをしたわせたまひて 川つら
ちかくをくり出させ献をすゝめ給ひしも如夢
幻泡うた類如露亦如電矣生者必滅のことわり
をまぬかれたまわぬかなしひ 又余に御め
くみ筑波山の陰にもことならざりし事
のかしこぎハ筆かきりあるわさなりとて
百の句におろかなる心をつらねて彼御類
前に顕わし侍らはかつハおほそれあらん

ものか 于時寛永六月四日

法橋昌琢拜

同

うへをくもかたみとなれるなてしこの
花には露もいとはるゝかな」オ



智仁親王筆，結構色紙（架蔵）

天地廿一・七種、横一八・三種で、金描下絵草花模様。マクリである。署名はないが、たとえば第三句めの「さ、無、からて」に自筆らしい特徴が見られよ

それから、参考までに架蔵の智仁親王筆色紙と短

冊、及び前述の八条宮の甥高松宮好仁親王筆色紙の以

上三点を紹介しておきたい。

□智仁親王筆、結構色紙

さくらちる木の

下かせハさむからて

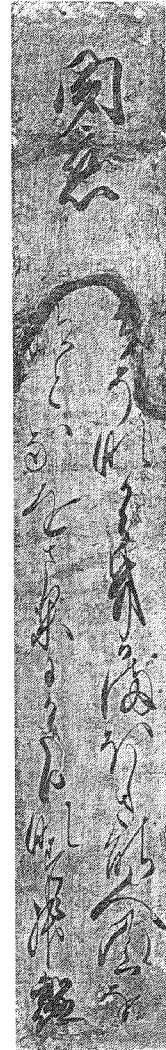
空にしくれぬ

雪そふりける

う。裏書きに「寛五／八条宮」と墨書されて寛永五

年春の詠、むろん徳元も在京時である。

□智仁親王筆、和歌短冊



智仁親王筆、和歌短冊（架蔵）

聞恋 よそなからきかまほしさの人の上を／なとなをさりにかたるなすらむ 智仁

右はすでに拙稿「古短冊礼賛（一）」（『京古本や往来』第51号所収）に紹介済みである。

高松宮好仁親王筆、結構色紙



高松宮好仁親王筆、結構色紙（架蔵）

十八公（※松）栄霜後露／
一千年色雪中深

天地廿一・八極、横一七・九極で、朱の地に金描下
 絵雲霞山水と貝模様の華麗なる色紙。マクリ。署名
 はないが、上句の「霜」の筆致に、下句の「雪」に
 それぞれ特徴が見られる。裏書き「寛九／高松宮好
 仁親王」と墨書され、寛永九年冬の詩である。因ミ
 に、高松宮の肉筆類は数が少ない。

○八月十二日、春茂、「山何」連歌一卷を興行（昌琢、
 発句）す。在京の徳元は一座した。

□寛永六年八月十二日

山何

唐錦及はし庭の萩の花 昌琢
 籬に玉を結ふ夕露 春茂
 月なから軒の端山は霧降て 昌侃
 翅はいつこ雁渡る声 春重
 舟うかふ浦は閑けき朝ほらけ 城久
 気色殊成春の海顔 九一
 氷とけて霞も立やさゝれ浪 昌程

岩ねにうつる日は長閑也 意信
 松陰の雫は苔に伝ひきて 徳元
 分いる方や深き谷の戸 宗之
 降雪に真柴もとらて帰る也 清親
 寒き風の吹とふく袖 犬公

(以下略)

(卷末句上)

昌琢 十三 城久 八 徳元 八
 春茂 八 九一 九 宗之 七
 昌侃 十二 昌程 九 清親 八
 春重 十 意信 七 犬公 一

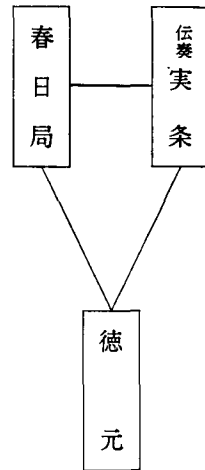
(「斎藤徳元集」58頁)

宗因筆『昌琢発句帳』（筆者、解題と翻刻すみ）には
 「から錦をよはし庭の萩か花」と少しく異同。脇句の
 春茂は春重と同門で、昌琢系である。寛永五年五月十
 八日の条を参照のこと。

●十月十日、一族の春日局は紫衣事件の解決のために上

洛し、中宮和子の御所より参内して三条西実条の猶妹なる身分で後水尾天皇に拝謁、「春日の局」号を賜う

（『徳川実紀』）。因みに徳元との関係を图示すれば、



という縁故が想定されようか（拙稿「徳元伝新考―寛永六年、東下前後のこと―」）。そして十一月三日に、

春日局は徳元ゆかりの三河吉田城（松平忠利）に一泊して帰東した。同月六日、三条西実条、内大臣に任ぜられる。武家伝奏も兼任（※この頃以降か、徳元は所望されて句短冊を呈上する）。八日、後水尾天皇が、にわかにな皇女一宮（明正天皇）に讓位。『忠利公御日記写』寛永六年十一月の条には、

十八日 ……亭（天）子様去八日ニ御位御すへり

御軍ノ御所へ御うつり女一宮様御ゆつり

候由岡内膳殿より申来候（松平忠利、在吉田城。）

とある。この頃、京極忠高は在江戸（『徳川実紀』）に、徳元は京都に滞在していた。

●十二月、昌塚、柳営連歌興行のために東下。

□『忠利公御日記写』寛永六年十二月の条

九日 昌塚被下候、泊被申候（松平忠利、在吉田

城）

○十二月末、徳元、ふたよび東下。同月廿六日に下着す。そして江戸馬喰町二丁目の居宅に定住した。その折の東下りの記はのちに『関東下向道記』（狂歌版）を始め、『海道下り』（『徳元俳諧鈔』所収、架蔵）『塵塚俳諧集』下巻所収、「東下り紀行書留発句」として述作。ほかに『江戸海道下り俳諧』も制作した。因みに「徳元、ふたよび東下」に関しては、先に笹野堅先生も『斎藤徳元集』のなかで同様に述べておられ（26頁）、

森川昭氏亦「冬再び東下。『塵塚誹諧集』に『寛永六曆三冬もやゝ末つかたに都を立てあつまへ』下ったことを記し、道中の句文を掲げている。既に述べた通り、『塵塚誹諧集』によって『同年霜月』江戸に於いて千句を独吟したことが記されて居り、その同年とは東大本『千句』によって寛永五年であることが知られたのであった。本年の東下は『極月下の六日』江戸に到着していることから見ても明らかにそれとは異なるものである。して見ると、寛永五年東下した徳元は一旦京都に帰り、再び本年江戸に下ったものと見える。」と考証せられた。むろん筆者も賛成である。

さて、如上の著作道の記類によれば徳元は紙子着る師走の頃、京都で親しき友だち―想うに二村宗久・橋屋慶純・辻（辻村）宗順（内侍原宗順カ）・里村昌偲・里村玄陳等々の連歌師仲間か―に送られて、まず三条大橋を駒もとどろとうち渡り、以下の文章は謡曲『杜若』や『東国下』を下敷きにして、作者徳元自身を『伊勢物語』の主人公昔男なる右馬頭在原業平

に擬して紀行文を展開しているようである。殊に『塵塚集』下巻に所収、東下り記の構成などにはその感が強い。栗田口、日の岡、神なし森、山科、関寺の町へと進む。逢坂の関で（※狂歌短冊有之）親しき友ら関送りの酒宴をしてくれて別れ、一路江戸に向かった。大津打出の浜、草津、栗本郡へそ村、守山、篠原を経て鏡の宿（※蒲生郡竜王町大字鏡）で泊まる。翌朝は天晴れて老曾の森を過ぎ、武佐、高宮、鳥井本、小野（斧）の宿、摺針山、番場、醒か井そして柏原で泊まり。次いで『関東下向道記』では寝物語の里の次条に、

車かへし、此坂を里人と行つて上りけるに、とはす語りをなんしける。昔柏原院不破の関屋のあれまくも面白かるらめ。えい覧有へしとて、御幸ありけるに、此所にて、御前追ける御隨身、すすみてまかりいそぎ立帰り奏しけるハ、此国の守こともおろそかなりとて、関屋もふきかへまうけして、あふき奉るなりと申す。その荒たらんを見まほしけれ。今ハ何せんとて、一首の御製に

ふきかへて月さへもらぬ板ひさはや住あら
 せ不破の関守

となん詠吟まし／＼て、是より還御幸(宋書)ならせ給ひに
 けり。それよりしてこそ、此坂を車かへしと名付
 待りれ(宋書)といふ。

とある。『塵塚集』も同じ(『海道下り』ハナシ)。たゞ
 し文中に里人が語る「昔柏原院云々」の話は誤伝であ
 って、実は『時しらぬふみ』(「左大臣義教公富士御覽
 記」トモ)によれば、

ふきかへて月こそもらぬ板ひさしとくすみあらせ
 不破のせきもり

と見えて、永享四年(一四三二)九月十一日、ときに
 將軍足利義教の自詠であった(外村展子氏『時しらぬふ
 み』のこと)——『書誌学月報』第28号所収)。以下、徳元の
 行程は中山道、現在のJ R東海道在来線に沿って旅を
 続けているようだ。居増(今須)、関か原、垂井と進ん
 で彼自身には懐旧の「美濃路」を経由、なお垂井宿で
 詠んだ徳元句「すゝばなや垂井にひえて関が原」に関

連して、仮名草子『元のもくあみ』(作者未詳、延宝
 八年九月刊)にも、

今須の宿を通りすぎ、松ふく風の身にしてみて、咳
 気を通す関が原、水鼻垂井といひながら、大垣・
 すのまた・おこしの里、清須・名古屋をうちすぎ
 て、……(上巻)

とある。青野が原では好きな朝酒に酔い、大垣城下は
 この頃、長子の郭然茂庵と共に扶持を受けている連歌
 大名岡部内膳正長盛の所領地。次いで、かつての知行
 所墨俣宿にて逗留、稲葉山もほのかに遠望出来た。彼
 の脳裡には、二十八年まえの、あの血腥い岐阜落城の
 光景がふっと去来したことであろう。『関東下向道記』
 には、

墨股、此所ハ古へそれかし知よしの里なりけれハ
 (この部分頭注、朱書にて「徳元武士にて此所知
 行なりし也」とある)、とり／＼馳走して、たう
 あミ打せ、名物の鯉を取、その日は河追遙になく
 さミ、逗留し侍り。

ゆかたひらきて川狩をすのまたにとりぬるう
をハこれそミのこひ

稲葉山のほのかに見えければ

たちわかれいなはまつ出せはたこ銭までとし
いはハまたかへり来ん

右、墨股の条は、すでに森川氏ご指摘（斎藤徳元『関東
下向道記』）の如く、徳元伝記資料としても貴重で、そ
れは末裔所蔵文書によって検しても立証せられよう。

小越（をこし）の渡り、美濃国から尾張国へと道の記は続く。

『塵塚集』には狂歌一首、

いとどしくすぎ行かたはみのお（を）はりうらめしくよ
る老のなみかな

と詠んでいる。蓋し右は『伊勢物語』第七段の、

むかし、お（を）とこありけり。京にありわびて（※
住ミツラクナツテ）、あづまにいきけるに、伊勢、
お（を）はりのあはひの海づらを行くに、浪のいと白く

立つを見て、

いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうら山しく

もかへる浪かな

となむよめりける（『日本古典文学大系』本、一一五頁）。

をふまえてはいるけれど、徳元の狂歌にはいかにも落魄した老の心がうかがわれよう。住みづらくなった京都でいったい何があったのか。いま失意の原因になるものを二、三挙げてみたい。○八条宮智仁親王の薨去。○春日局の上洛にもかかわらず後水尾帝の突如の讓位。○幕府への仕官運動とその見通し。因みに歿後、直系の孫齋藤利武は旗本に仕官がかなう。等々が推測せられよう。なお『尤草紙』上―四十、帰るものゝ品々の条にも、

昔、男、あづまへ行けるに、伊勢や尾張の海づら
に立浪をみて、

いとどしく過にしかたのこひしきにうら山し
くも帰る浪かな（『新日本古典文学大系』本、九
三頁―渡辺守邦氏校注）

と見えているが、校注者の註記はなし。

熱田宮に詣でて、やがて東海道へ出た。鳴海、「道

より馬手にあたりて、小高き古塚有。そのかミ織田の信長公、駿河義基と夜軍有しに、義基たゞかひまけて、此所にて果給ひし古墳なりと聞て「狂歌一首、

あつき坂もち鏑とつてこねつきにうち死をせしよ
しもとのつか

池鯉鮒、そして五位(御油)・赤坂の宿場では自身の位も「従五位下」なるに因んで、

うへ人のくらゐも五位に旅ねしてあか装束てこゆるあかさか

と詠む。風交深き松平主殿頭忠利が所領地の吉田、遠江汐見坂を下ると白須賀の浜、舟渡りして浜松に着く。見付の国府、吹雪のなかに日坂をのぼり佐夜の中山、嶋田、駿河国宇津の山、以下の展開は『伊勢物語』第九段東下りの章をふまえている。鞠子、「此里の山本に草庵あり。古への連歌し柴屋宗長の住給ひし旧跡也。寺の名ハすなはち柴屋寺と号す。立より侍りて」

ふる雪に一夜ふす何柴の庵

安倍の河原(折柄雨降る)をうち過ぎて府中(静岡)に入る。

もろこしの里なりければ、誰ともしらで有柵に腰打かけて主をみればみし人也。其まゝ奥に誘引せられて、家とうじ盃取あへず童に小歌うたはせ、しきりになぐさめ侍れば

酒えんしてあづまあそびやるが舞(塵塚集)
下)

そして志豆機山(賤機山)に於て一句、

しつはたやかたひら雪の寒さらし(『関東下向道

記』)

山の南麓には浅間宮有之。神主は国学にも関心深き志貴宮内少輔昌勝(万治二年十二月歿)、因みに彼の祖先志貴駿河守泰宗なる神主は『宗長日記』に登場する(島津忠夫氏校注、岩波文庫版66頁)。徳元は寛永十五年十一月始めにふたたびここ浅間宮を詣で、志貴昌勝の亭に立ち寄っている(拙稿「晩年の徳元―『賦品何誹諧』成立考―)。なれども今回の、「主をみればみし人」で

「しきりになぐさめ」てくれた人物はあるいは京出身か、名もわからない。木枯の森・江尻・興津にて「清見寺の致景をながめ」て、由井・蒲原の磯も過ぎ、富士川を渡って吉原の宿に泊まる。『関東下向道記』には、

此ほとハ雲の立まひかくれぬる富士の、けふハ心よく天はれけれハ、つくく〜と見をりて

けふりにもす〜けすしろし富士の雪

とある。富士山は寛永四年來、噴火していたらしい（新日本古典文学大系『初期俳諧集』一二四頁―森川昭氏校注）。宗因筆『昌琢発句帳』（拙稿参照）秋の部雑秋の条にも、

於駿府

見る度に身にしむ富士の煙哉

と見える。

伊豆の三嶋、明くれば山中四里を経て箱根の峠にのぼる。

坂を下れハ、馬手にあたりて小山有。是をひしり

山と云。一とせ大閣御所秀吉公、小田原の北条氏

政と取あひ給ひ、すてに此所に御動座有て、城を八重はたへに取巻、諸手よりきひしくしよりてせめけり。此ひしり山を付城にこしらへ、大勢の軍兵に大石をよせさせ、山の上に高石垣をつき、その上より目の下に見くたし、戦攻したまへハ、城中こらへず、氏政腹を切、息氏直ハ高野山へつかはされて、落城せしめ畢。何者かしたりけん落書

ひしり山老たる父をうたせつゝ身をうち直ハ

高野へそゆく（『関東下向道記』）

右の条は天正十八年六月末、徳元ときに卅二歳の夏、豊臣秀吉が石垣山より小田原城攻略の模様を回顧するくだりだが、その戦記はリアルで実見のである。ところが、それもそのはず、実はこのとき父親の齋藤正印軒元忠が「息齋藤忠蔵」（※徳元ノ初名カ）をして小田原在陣の秀吉宛に陣中見舞の品々を贈っていたようである。反町茂雄氏編『弘文荘敬愛書函録』I（昭57・3刊）に収録される、齋藤正印宛天正十八年五月廿八

日付、「豊臣秀吉朱印状」一幅がそれ。左に全文と反町氏の解説文をそのまま掲出する。(写真参照)

97 豊臣秀吉朱印状 齋藤正印宛
(天正十八年)五月廿八日付

一幅 六〇〇、〇〇〇円

この人独特の、ごく大型の懐紙二つ折。本紙の大きさはタテ四一、〇ヨコ五九、八種。本文は表の折のみに記し、大字草書十行、左の如し。

御陣為見廻一息齋藤忠蔵差越、弓弦

貳百丁、天鼠革廿、同別二百、天鼠

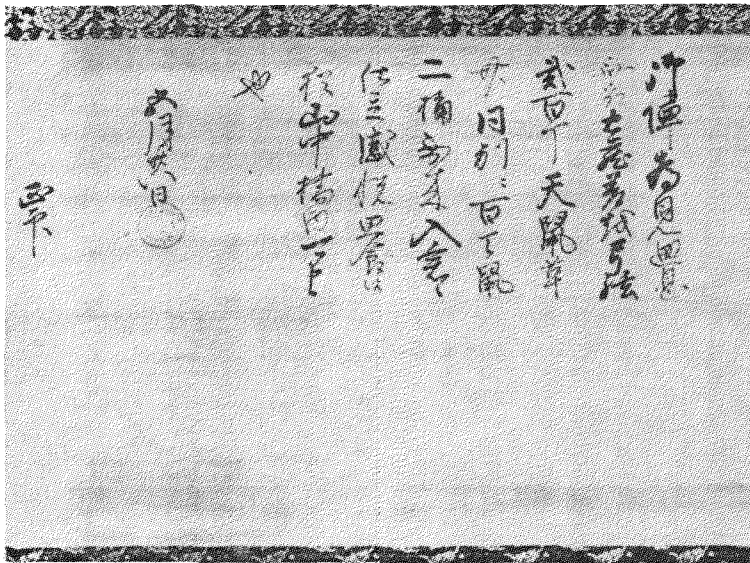
二桶到来、入念之仕立、感悦思食候、

猶山中橋内可申候也

五月廿八日(朱印)

正印

日付の下に秀吉の糸印風の太朱印。あての正印については考え及ばぬが、文中に「息齋藤忠蔵」云々とあるから、齋藤正印という人物、恐らく伊豆・相模辺の土豪であろう。陣中見舞の品々に対する礼状で、文末に見える山中橋内は山中長俊、天正十三年



齋藤正印宛、豊臣秀吉朱印状、(天正18年)5月28日付(『弘文荘敬愛書図録』Iより)

から秀吉に仕えて、後に任官して山城守、給一万石。天正十八年の小田原攻に従軍して居る。この書状は恐らくその時のもの、本文も長俊の自筆らしく、堂々たる書き振り。当五月には秀吉は小田原に在陣して居る。「天鼠」とは何か不明、普通には天鼠は蝙蝠の異名である。

保存良。古い桐箱入。蓋裏に「此書翰伝云、秀吉公所賜我 正印君、依装以珍藏之 明治三十四年 齋藤利明」との識語がある。永らく後裔の人の家に伝蔵され、そこで表具したものの(一八二頁)。

ただし、右の解説中に「齋藤正印という人物、恐らく伊豆・相模辺の土豪であろう。」と推考せられたのは誤り。ほかはすべて新事実で、なお正印軒の後裔「齋藤利明」なる人物が明治三十四年時に生存していた事実が知られることも共に興味深い資料であろう。(※追記参照)

坂を下って相模国に入った。梅沢の里、大磯で虎御石を見(※狂歌短冊を架蔵)、藤沢の遊行寺に詣でて、上人の教珠の花房いとなくさく藤沢の寺そたふ

とき

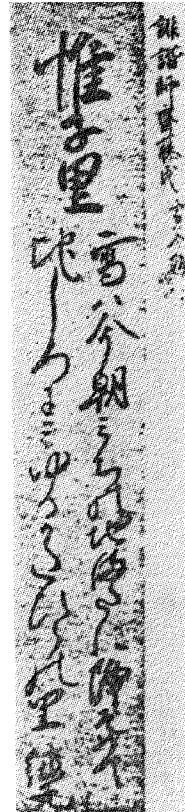
と狂歌を詠む。かくして、「行くて武蔵の国に到りぬ。その名も涼しきかたひらの里に来て、所の人に里の名のいはれを尋ね侍れハ、海辺にてハ有なから浦のなき所なれハとて、帷子とハ名付侍る也といふ。」と。右の一条は、『江戸名所図会』にも異同の形で引用される。それから、ここ帷子里で詠んだ新出和歌短冊一枚が有之。思文閣刊『名家古筆手鑑集』に収録される。島本昌一氏のご教示(昭48夏)によった(写真参照)。上無河、川崎、品川を経て、徳元は十二月廿六日に江戸に到着した。それは推測するに十五日間ぐらいの旅程であったろう。『関東下向道記』の巻末には狂歌一首、

のほり下り両道かくる武蔵あふみさすか駄賃ハ乗
もうるさし

と詠んでいるが、のちに改作した。

京と江戸と両みちかくるむさし鑑さすがだちんは
乗もうるさし(『塵塚集』下、『海道下り』、『古今夷

「帷子里」和歌短冊（『名家古筆手鑑集』より）



帷子里 雪ハ今朝ミちのちまたに降そめて地しろにミゆるかたひらの里 徳元

曲集』に収録)

寛永六年十月廿二日の昼、主君京極忠高は江戸城西ノ丸に於て大御所秀忠の茶会に召されていた。このことは徳元が忠高に扈從して東下したのではないことを示している。そして十一月初め、一族で親交もある春日局が帰東。京都では後水尾帝がにわかにな女一宮に讓位されるなど緊迫した朝幕関係のうちに、徳元はかくして十二月廿六日にふたたび江戸に下着した。ときに

七十一歳。日本橋を渡って馬喰町二丁目所持の家に定

住したようである（『綾錦』）。そのことは曾孫の齋藤

徳潤も述べているし、有賀禄郎編『日本橋横山町馬喰

町史』（昭27・4、横山町馬喰町問屋連盟刊）にも記

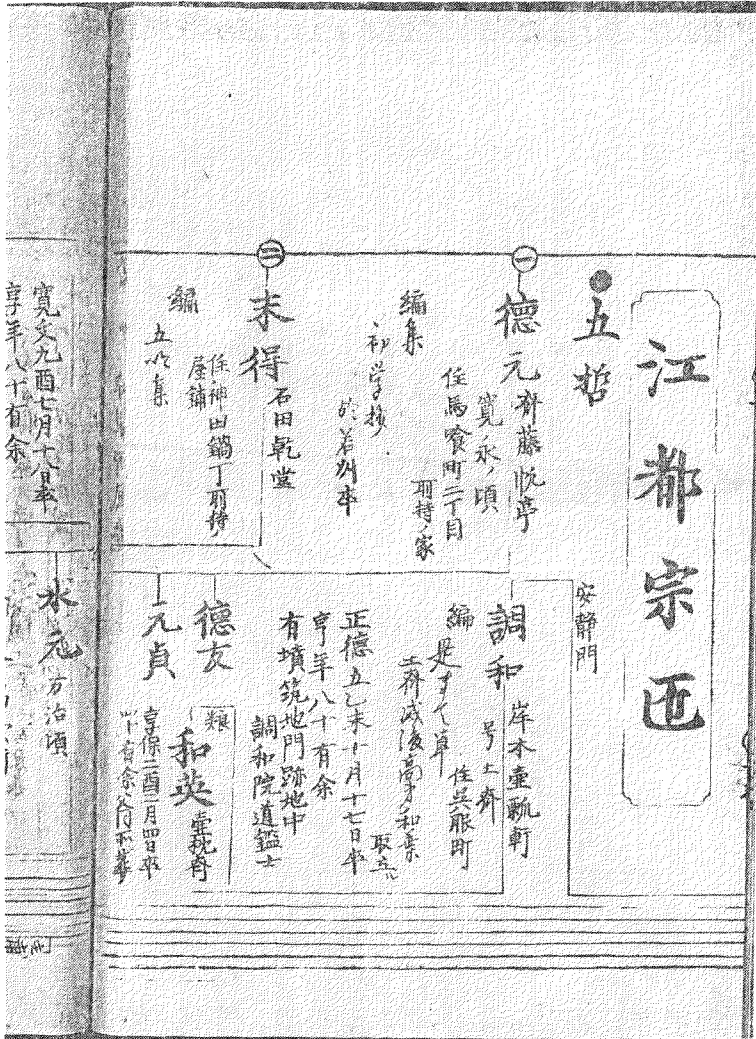
される（一五〇頁）。同じ頃に、師の里村昌琢も柳營連

歌興行のために東下。昌琢とは翌七年春、江戸に於て

たびたび連歌会で同座した。

いったい寛永期における、江戸馬喰町の景観はどん

なさまであつたらうか。私は平成元年五月九日、河原



江都宗匠

五哲

安静門

徳元 齊藤悦亭

寛永八頃
任馬喰町三丁目

編集

初学抄
於若列奉

末得 石田乾堂

編
立心集
任神田鍋丁町持
屋舖

調和 岸本壘軌軒

編
是子く草
任呉服町

正徳五乙未十月十七日卒
取立

有墳筑地門跡地中

調和院道鑑士

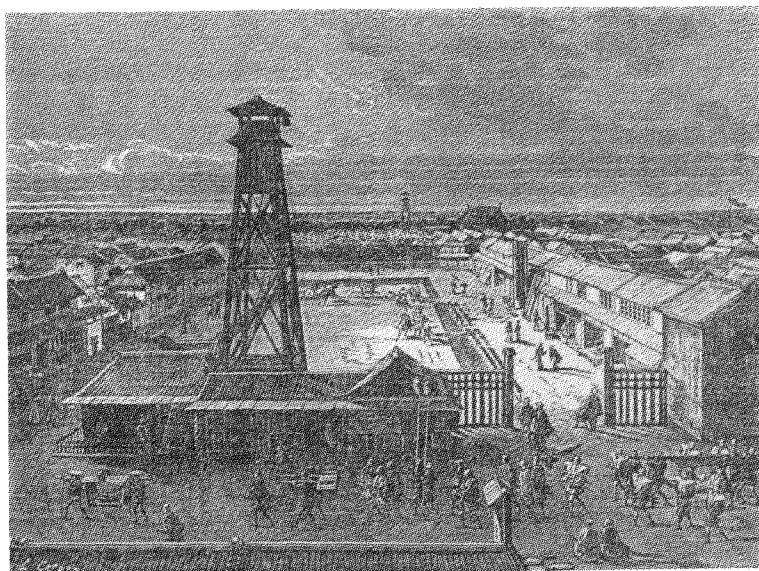
徳友 和英 壘執奇

元貞
享保三酉月四日卒
十有餘父同不華

水元 方治順

寛文九酉七月十八日卒
享年八十有餘

『綾錦』（菊岡沾涼編，享保17年6月刊，架蔵）卷上より



馬術訓練する馬喰町馬場（L. クレポン模写，パリ刊）

町三条のキクオ書店で一枚の木彫版画を入手したのだ。それは L. Crepon 模写に成る「馬術訓練する馬喰町馬場」で、一八七〇（明治三）年 Paris 版のもの。もともと原画は『江戸名所図会』に描出の「馬喰町馬場」からであるが、それよりもクレポン模写の絵にはよりいっそう臨場感と迫力が感じられるのだ。そのうえ維新頃における、パリ刊行の江戸馬喰町景である点も国際的でおもしろい。有賀祿郎氏によれば『名所図会』にある馬場の図は二丁目から見たものという（前掲書一〇八頁）。すれば向かって右側の町並が馬喰町二丁目・三丁目で、徳元居宅跡ものばれよう。裏通りには願人坊主（僧形の乞食）が集団で住んでいた（延宝四序『淋敷座之慰』）。中央正面は火の見櫓、続いて初音の馬場が描かれているのである。

当代の馬喰町は『日本橋横山町馬喰町史』によれば、町家が多く一丁目は社寺門前町で、二丁目は「次に二丁目を取出して見れば、ここは西は一丁目、東は三丁目、南は横山町五番地、北は東神田八番地に包ま



ぼくろう町二丁目付近の図（寛永9年12月刊『武州豊嶋郡江戸庄図』
 より、東京都立中央図書館蔵）

るほぼ正方形の地であり、昔は代々名主高木源兵衛及び岡本谷左衛門の屋敷があった。その屋敷は今の株式会社花王及び木村栄三郎商店のある所から裏方三番地にまで拡がっていた。現在の三番地地域は馬場地であったが、元禄六年及び享保二十年の二回に於て、馬場は取払われて町家となった。」(四二頁)とある。四丁目は旅宿町殊に訴訟に関係する公事宿で(四二頁)、従って博労たちも亦集まってきた、馬喰町となっていたらしい。季貞作『江戸町名詳譜』(正保三年、徳元判)に、

(名才14) 秋にし熊をとる皮や町
 (名ウ1) 露ふかきあをりをかけぬ馬喰町

と詠んでいる。すなわち前句から熊皮の障泥あせり。馬商人たちがたむろする光景と見たい。当時の馬喰町の様子がかがわれるであろう(京古本や往来) 52・53号所収、拙稿「古短冊礼賛」(二)より再録)。

(平成三・九・十八稿)

〔追記〕

最近、次の如き二資料の存在を知り得た。いずれも新出資料で、(一)は雲英末雄氏からのご教示。寛永六年閏二月九日付、生嶋玄蕃宛徳元第四書簡である。江戸より帰京早々の徳元が生嶋玄蕃を介して八条宮に御目見えを願ひ出でたるもの。生嶋玄蕃秀成は八条宮の家司。早稲田大学蔵資料影印叢書「近世古文書集」に収録。

(二)は、大分県臼杵市立図書館所蔵の古写本によって斎藤正印軒の後裔斎藤利明(精一郎)氏がもと稲葉藩臣で、北海部郡々長の職に在ったこと。更に福岡県久留米市民図書館所蔵、有馬藩「御家中略系譜」には、斎藤道三——女子

